

地震を記すということ

——地震の社会学(二)——

原 田 隆 司

はじめに

地球上の日本のような場所では、地震の発生頻度は高く、なかには大規模なものもある。私たちは、日常的に地面や建物の揺れを感じ、稀には大きな地震で被害を受ける。こうして地震は直接間接の体験として記憶され、また、明治以降は、さまざまな機器で観測され記録として残されている。そうした記憶や記録などをもとにして、地震はさまざまな方法で記されてきた。

本稿では、日本に残る夥しい数の地震史料のうち古代の史料をとりあげ、地震というものが、どのように記されていたのかを考察する。具体的には、六国史と呼ばれる奈良時代を中心とした史料をとおして考えてみたい。⁽¹⁾

一、六国史の世界

(一)『日本書紀』に記された地震

日本における地震に関する最古の記事は、『日本書紀』巻第十三(允恭天皇)とされている。

【一】日本書紀 卷第十三 允恭天皇五年
五年秋七月丙子朔己丑、地震。

五年の秋七月の丙子の朔己丑に、地震る。
五年の秋七月の丙子の朔己丑(十四日)に、地震があつた。

この記事について「日本古典文学大系」(岩波書店)では「地震の記事の初見。ナ斗のナは、大地の意。斗は、しっかりとすわつているところ。フルが、震動の意。後世、ナ斗が地震の意と見られるに至つたのは誤解に基づく」という註記が附されている。なお、允恭天皇五年は西暦四一六年とされている。
地震の様子が多少とも詳しく記されているのは、巻第二十二(推古天皇)である。

【二】日本書紀 卷第二十二 推古天皇七年

七年夏四月乙未朔辛酉、地動舍屋悉破。則令四方、俾祭地震神。
七年の夏四月の乙未の朔辛酉に、地動りて舍屋悉に破たれぬ。即ち四方に令して、地震の神を祭らしむ。
七年の夏四月の乙未の朔辛酉(二十七日)に、地震があり、家屋がことごとく壊れた。そこで全国に命じて、地震の神を祭らせた。

推古天皇七年は、西暦五九九年とされている。「新編日本古典文学全集」(小学館)では、この「地動」に「ナ斗はナ(地)の古語」斗(居)で、地盤の意、フルは振動。地震でゆれる意」と註記されている。

白川静は『字訓』の「振・震」の項目にこの部分を引用し、「ふる」という日本語は、漢字では震、振と表記されるが、「小さくふり動かす。ゆり動かすことによつて、その生命力がめざめ、發揮されると考えられた」と説明している。震の字は、『説文解字』に「劈歴、物を振はす者なり」とあり、震電を指す字であつたが、のちに地震の字に用いるようになったという。「震電」は『日本国語大辞典』によれば、「かみなりといはず。いなずまが光りかみなりが鳴ること」である。

この二件を含めて『日本書紀』には地震の記事が二五件ある(坂本太郎『六国史』二一四)。そのほとんどは【一】のように、何日に地震があつた、というだけの記述である。なお、日本書紀だけでなく、後にみる六国史の残りの五点も編年体であり、すべてのがらが日付の順に記されている。

『日本書紀』で【二】のように地震の様子が記されているものは、他に二か所ある。ひとつは、天武天皇七年(西暦六八七年)十二月の筑紫国の地震である。

【三】日本書紀 卷第二十九 天武天皇七年十二月

是月、筑紫國大地動之。地裂廣二丈、長三千餘丈。百姓舍屋、毎村多仆壞。是時、百姓一家有岡上。當于地動夕、以岡崩處遷。然家既全、而無破壊。家人不知岡崩家避。但會明後、知以大驚焉。

是の月に、筑紫國、大きに地動る。地裂くること廣さ二丈、長さ三千餘丈。百姓の舍屋、村毎に多く仆れ壞れたり。是の時に、百姓の一家、岡の上に有り。地動る夕に當りて、岡崩れて處遷れり。然れども家既に全くして、破壊るること無し。家の人、岡の崩れて家の避れることを知らず。但し會明の後に、知りて大きに驚く。

この月に、筑紫國で大きな地震があつた。地が幅二丈、長さ三千余丈にわたつて裂け、百姓の家がいたところの村々で数多く倒壊した。このとき、岡の上にあつたある百姓の家は、地震の夜に岡が崩れ、違った場所に動いてしまった。しかし家は無事で、こわれなかつた。その家の人は、岡が崩れ、家が動いたことに気がつかず、夜が明けてからそれを知つて、たいへんびっくりしたという。

一丈は十尺で、当時の一尺はおよそ三十センチである(井上光貞他『律令』四七五)。大地の裂け目は幅六メートル、長さ九キロ以上ということになる。

もう一か所は、同じく卷第二十九の天武天皇十三年(西暦六八四年)十月である。

【四】日本書紀 卷二十九 天武天皇十三年十月

壬辰、逮于人定、大地震。擧國男女叫唱、不知東西。則山崩河涌。諸國郡官舍、及百姓倉屋、寺塔神社、破壊之類、不_レ可_二勝數_一。由是、人民及六畜、多死傷之。時伊豫湯泉、没而不_レ出。土左國田苑五十餘萬頃没為_レ海。古老曰、若_レ是地動、未_二曾有_一也。

壬辰に、人定に逮りて、大きに地震る。國擧りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸國の郡の官舍、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て數ふべからず。是に由りて、人民及び六畜、多に死傷はる。時に伊豫湯泉、没れて出でず。土左國の田苑五十餘萬頃、没れて海と為る。古老の曰はく、「是の如く地動ること、未だ曾より有らず」といふ。

壬辰(十四日)に、人定(午後十時ごろ)になつて大きな地震がおこり、国中の男女が叫びあい、逃げまどつた。山は崩れ、川はわきかえり、諸國の国郡の庁舍、百姓の家屋や倉庫、寺院・神社の破壊されたものは数知れず、人民や家畜も多く死傷した。このとき、伊予温泉(道後温泉)が埋もれて出なくなり、土左國では田五十餘万頃(約一二〇〇ヘクタール)が海に没した。古老は、「このような地震は、かつてなかつたことだ」と言つた。

「未曾有也」という古老の言葉を含めて、現在の私たちも想像できる大きな地震が記されている。

(一一二) 六国史の編纂方法

『日本書紀』と、それに続いて編纂された『続日本紀』『日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』は「勅撰の正史」として六国史と総称されている。坂本太郎は、その編纂過程について次のように述べている。

八世紀から十世紀初頭にかけての、律令政治のはなやかな時代の政府の權威を負って撰修せられた。(中略) 撰者には首班として皇族が大臣があたり、その下に才能のすぐれた高級官僚と当代一流の学者とがえられ、撰修の役所としては、撰日本紀所または撰国史所という部局が政府内に設けられた。材料は図書寮で筆録せられた記録や、式部省で撰修した功臣の伝記を用いたほか、その時に応じて必要な史料を政府の命をもって提出させもした。すべては、時の政府の力によってできた史書であって、いいかえれば官撰の史書である(坂本太郎『六国史』吉川弘文館、一三二)。

さらに、坂本によれば、選者による違いはあるものの、六国史は単なる「記録」ではなく、文学的名作品という側面も持っている。「史実の取捨選択」とともに、文に「潤色改削」が施され、「その過程において文学的要素の加わる余地を開いている」からである。それは、次のような理由からである。

事実を挙示し、精神を高揚するために、文を練り辞を修し、その書によって後世の今を見ることが、なお今の昔をみるようにしたいと、読者の理解と共感を求めたのである(坂本太郎「六国史の文学性」三二六)。

六国史はそれぞれ時間をかけて編纂された。撰修に要した期間、最終的に編纂された年、対象になっている年代とを列挙しておく。

	撰修期間	完成年	対象とする年代
日本書紀	三九年	養老四年(七二〇年)	神代—六九七年
続日本紀	三三年	延暦十六年(七九七年)	六九七年—七九一年
日本後紀	二一年	承和七年(八四〇年)	七九一年—八三三年
続日本後紀	一四年	貞観十一年(八六九年)	八三三年—八五〇年
日本文徳天皇実録	八年	元慶三年(八七九年)	八五〇年—八五八年
日本三代実録	八年	延喜元年(九〇一年)	八五八年—八八七年

(坂本太郎『六国史』より)

『続日本紀』では、完成時から計算すれば、およそ百年前のことから記されており、『日本後紀』でも五十年ほど前のことから纏められている。当時の記録を基にしていたといっても「勅撰の正史」として長い期間をかけて編纂されたものである。「時の政府の力によって」作り上げられた世界である。

(一三) 雨、旱、風、地震—『続日本紀』より

ここで『続日本紀』から引用してみよう。『続日本紀』は「日本書紀」のあとをうけて、六九七年から七九一年までの九十五年にわたる歴史を記述した「正史である。『万葉歌群』の背景、律令の実施状況、そして古文書一通一通の持つ意味を明らかにしてくれる、奈良時代にとっての基本的な史料」である(青木和夫「続日本紀への招待」四)。

【五】続日本紀 卷十一 天平六年(七三四年) 四月

○夏四月甲午、免河内国安宿・大県・志紀三郡今年田租。以供_レ竹原井頓宮也。○戊戌、大地震、壊_二天下百姓廬舍_一。压死者多。山崩川擁、地往々_レ坼裂、不可_二勝数_一。○癸卯、遣_二使畿内七道諸国_一、檢_二看被_二地震_一神社。○戊申、詔曰、今月七日、地震殊_レ常。恐動_二山陵_一。宜_レ遣_二諸王・真人_一、副_二土師宿禰一人_一、檢_二看諱所八処及有功王之墓_一。又詔曰、地震之災、恐由_二政事有_レ闕_一。凡厥庶寮勉_レ職理_二事_一。自_レ今以後、若不_二改勵_一、隨_二其状迹_一、必將_二貶黜_一焉。○壬子、遣_二使於京及畿内_一、問_二百姓所_レ疾苦_一。詔曰、比日、天地之災、有_レ異_二於常_一。思、朕撫育之化、於_二汝百姓_一有所_レ闕失_一。今故、發_二遣使者_一、問_二其疾苦_一。宜_レ知_二朕意_一焉。諸道節度使事既訖。於是、令_二国司主典已上_一掌_二知其事_一。

○夏四月甲午、河内国安宿・大県・志紀の三郡に今年の田租を免す。竹原井頓宮に供_レれるを以てなり。○戊戌、地大_ニきに震_レりて、天下の百姓の廬舍を壊つ。压死せる者多し。山崩れ川擁_レり、地往々_ニ坼裂_一くること、勝_レて数ふべからず。○癸卯、使を畿内・七道の諸国に遣して、地震を被_レりし神社を檢へ看しむ。○戊申、

詔して曰はく、「今月七日の地震は常に殊なり。恐るらくは、山陵を動さむことを。諸王・真人を遣し、土師宿禰一人を副へて、諱所八処と、功有りし王の墓とを檢へ看しむべし」とのたまふ。また、詔して曰はく、「地震ふる災は、恐るらくは政事に闕けたること有るに由らむ。凡そ厥の庶の寮、勉めて職を理め事を理めよ。今より以後、若し改め励まずば、その状迹に随ひて必ず貶黜けむ」とのたまふ。○壬子、使を京と畿内とに遣して、百姓の疾苦しむ所を問はしむ。詔して曰はく、「比日、天地の災、常に異なること有り。思ふに、朕が撫育の化、汝百姓に闕失せる所有らむか。今故に使者を發遣して、その疾苦を問はしむ。朕が意を知るべし」とのたまふ。諸道の節度使の事、既に訖りぬ。是に、国司主典已上をしてその事を掌り知らしむ。

夏四月甲午(三日)。河内の国の安宿・大県・志紀三郡の今年の田租を免除した。(前月に天皇が宿泊した)竹原井頓宮に仕えたからである。戊戌(七日)。大きな地震があった。天下の人々の廬舎が壊れ、圧死した者が多かった。山は崩れ川はふさがり、地割れが往々にしておこり、その数は数えきれないほどであった。癸卯(十二日)。使者を畿内七道諸国に派遣して、地震で被害を受けた神社を調査させた。戊申(十七日)。天皇が詔した。「今月七日の地震は、普通ではなかった。おそらくは山陵に被害を与えているかもしれない。諸王や真人に土師宿禰一人を副えて派遣し、天皇陵八カ所と、功のあった王の墓を検査させよ」。また次のように詔した。「地震の災難は、おそらく政治に欠けたところがあったことによるのであろう。諸官司はその職務の遂行に勉めよ。今後、もし心を入れかえてはげまなければ、その状況に応じて、必ず官位をおとすであろう。壬子(二十一日)。使者を京および畿内に派遣して、人々のなやみ苦しむところを問わせた。天皇は詔した。「このごろの天地の災難は、異常である。思うに、朕がいくくしみ育てて徳化することが、汝らについては欠けるところがあったようである。そのために、いま使者を遣わして、汝らのなやみ苦しむところを問わせるのである。朕の心をよく理解せよ」。諸道節度使の任務は既に終わった。そこで国司の主典以上に節度使の任務を掌握し管轄させた。

これは地震の被害と、朝廷の対応、そして天皇のことばである詔が記されている箇所である。

さて、星野聰・村尾義和『続日本紀総索引』を用いて数えてみると、『続日本紀』には、地震の記事は、「震」を用いたものが八七件、「動」を用いたものが六件、あわせて九三件ある。しかし、この引用のように被害を含めて詳細に記されているのは、わずか六件にとどまる。他は、『日本書紀』から引用した【一】のように、ただ「地震」とだけ記されている。

同じ『続日本紀』から、べつの所を引用してみよう。

【六】続日本紀 巻第六 靈龜元年(七一五年) 五月―七月

○丙午、參河国地震。壞正倉冊七。又百姓廬舎、往々陥没。○庚戌、移相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野六国富民千戸、配陸奥焉。○六月甲寅、一品長親王薨。天武天皇第四之皇子也。○庚申、開大倭国都祁山之道。○壬戌、太政官奏、懸像失度、亢旱弥旬。恐東臯不耕、南畝損稼。昔者、周王遇旱、有雲漢之詩。漢帝祈雨、興改元之詔。人君之願、載感上天。請、奉幣帛、祈於諸社、使民有年。誰知克力。○癸亥、設齋於弘福・法隆二寺。詔、遣使奉幣帛于諸社、祈雨于名山大川。於是、未經數日、澍雨滂沱。時人以為、聖德感通所致焉。因賜百官人祿各有差。○丁卯、諸国人甘戸、移附京職。由殖貨也。○秋七月庚辰朔、日有蝕之。○己丑、地震。行幸甕原離宮。賜從五位下紀朝臣淨人數人穀百石。優學士也。○丙午、參河国に地震ふる。正倉冊七を壞つ。また、百姓の廬舎、往々く陥り没む。○庚戌、相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野の六国の富める民千戸を移して、陸奥に配く。○六月甲寅、一品長親王薨しぬ。天武天皇の第四の皇子なり。○庚申、大倭国の都祁山の道を開く。○壬戌、太政官奏すらく、「懸像度を失ひて、亢旱旬に弥る。恐るらくは、東臯耕さず、南畝稼を損ふことを。昔者、周王、早に遇ひて雲漢の詩有りき。漢帝、雨を祈りて改元の詔を興しき。人君の願は、載ち上天に感ぜしむ。請ふ、幣帛を奉りて諸社に祈り、民をして年有らしめむことを。誰か堯の力を知らむ」とまうす。○癸亥、弘福・法隆の

二寺に設齋す。詔して、使を遣して、幣帛を諸社に奉りて、雨を名山大川に祈はしめたまふ。是に数日を経ずして、澍雨滂沱なり。時の人以為へらく、「聖徳感通して致せるなり」とおもへり。因て百官人に禄賜ふこと各差有り。○丁卯、諸国の人廿戸を京職に移し附く。殖貨に由りてなり。○秋七月庚辰の朔、日蝕ゆること有り。○己丑。地震ふる。甕原離宮に行幸したまふ。従五位下紀朝臣淨人数人に穀百石を賜ふ。学士を優まむとなり。

〔五月〕丙午（二十六日）。参河国に地震があり、正倉（田租の稲などを納める倉）が四十七棟倒壊した。また人民の廬舎（粗末な建物）もあちこちで陥没した。庚戌（三十日）。相模・上総・常陸・上野・武蔵・下野の六国の富裕な民千戸を陸奥国に移し置いた。六月甲寅（四日）。一品の長親王が薨じた。天武天皇の第四の皇子である。庚申（十日）。大倭国の都祁の山道を開いた。壬戌（十二日）。太政官が次のように天皇に奏上した。「日月の運行が普通ではなく、ひでりが旬日にわたっています。恐らくこのままでは田畑を耕作することもできず、收穫にも損害がでるでしょう。昔、周王はひでりにあつて「雨を祈り、これを称えて大夫仍叔は」雲漢の詩を作りました。漢帝は雨を乞うために年号を改める詔を出しています。人に君として臨むものの願ひは、すなわち上天（天帝）を感応させます。幣帛を諸神社に奉納して（雨を）祈りたいと思います。人々に稔りを得させるならば、誰が（それを）聖天子堯（のような陛下）のお力と知りましようか。癸亥（十三日）。弘福・法隆の二寺に法会を催して食事を供した。（先に天皇の）詔があつて諸神社に使者を遣わして幣帛を奉納し、名山・大川に雨乞いをした。そうするとここに数日を経ずして時節にかなった恵みの雨がたっぷり降った。世間では天子の徳に天が感応したためにこうなったのであると思つた。これによつて、全ての官人たちに身分に応じて禄を授けた。丁卯（十七日）。諸国の人、二十戸を（京に移し）戸籍を京職に附けた。錢をふやすのに秀でているからである。秋七月庚辰朔。日蝕があつた。己丑（十日）。地震があつた。（天皇が）甕原離宮に行幸した。従五位下の紀朝臣淨人数人に穀百斛を賜わった。学士（学問に優れた者）を優遇するためである。

五月から七月の初めまでの記述である。参河国での地震発生と被害、陸奥に対する施策、官司の死亡記事、道路の建設、太政官から天皇へ早のことが奏上され神社へ奉納をし、祈禱を行ったこと、その結果、雨が降ったこと、それを受けて官人に禄が与えられたこと、専門家を登用したこと、七月に入つて日蝕があつたこと、天皇の行幸、十日に地震があつたこと、そして学士の優遇策のこと。このなかでは五月におこつた参河国の地震については被害も記されているが、七月のほうでは、ただ日付（己丑）と「地震」とだけ書かれている。先に触れたように、『日本書紀』『続日本紀』をはじめ六国史における地震の記事は、このようにただ「地震」とだけ記されているものが大半である。

『続日本紀総索引』を用いて、雨、風、旱を数えてみると、「雨」の記述は九〇件、雨とは別に「霖雨」が一二件あり、合計一〇二件となる。「風」は六〇件、「旱」は六五件である。これらは、被害状況と共に記されているものが多く、また、この引用部分のように、詔のなかで出てくることも多い。雨・霖雨では二四件で約四分の一、旱では二四件で三分の一以上が詔のなかで用いられている。そして、この記事のように、地震、雨、旱が同じところで記載されていても、雨や旱のほうが重大なこととして詳しく記されている。

もうひとつ、雨に関する記述の部分をあげてみよう。

【七】続日本紀 卷第一 文武天皇二年（六九八年）四月―五月

○戊午、奉_二馬于芳野水分峯神_一。祈_レ雨也。○五月庚申朔、諸国旱。因奉_二幣帛于諸社_一。○甲子、遣_二使于京畿_一、祈_二雨於名山大川_一。○乙亥、遣_二使于諸国_一、巡_二監田疇_一。○甲申、令_二大宰府繕_二治大野・基肆・鞠智三城_一。○六月丙申、近江国獻_二白樊石_一。○壬寅、越後国蝦狄獻_二方物_一。○丙辰、奉_二馬于諸社_一。祈_レ雨也。

○戊午、馬を芳野水分峯神に奉る。雨を祈へればなり。○五月庚申の朔、諸国旱す。因て幣帛を諸社に奉る。○甲子、使を京畿に遣して、雨を名山大川に祈はしむ。○乙亥、使を諸国に遣りて、田疇を巡り監しむ。○甲申、大宰府をして大野・基肆・鞠智の三城を繕治はしむ。○六月丙申、近江国、白樊石を獻る。○

壬寅、越後国の蝦狄、方物を献る。○丙辰、馬を諸社に奉る。雨を祈へればなり。

戊午(四月二九日)。朝廷は芳野水分の峯の神に馬を奉った。雨が降るように祈るためである。五月庚申の朔、諸国に旱害が起こった。それで幣帛を諸国の神社に奉った。甲子(五日)。使を京と畿内に遣わし、雨が降るように名山と大川に祈った。乙亥(十六日)。使を諸国に遣わし、田や畑を巡視させた。甲申(二十五日)。大宰府に命じて、大野・基肆・鞠智の三城を修理させた。六月丙申(八日)、近江国が白焚石(明礬の鉱石)を献上した。壬寅(十四日)、越後国の蝦狄が土地の産物を献上した。丙辰(二十八日)。馬を諸神社に奉った。雨が降るように祈るためである。

このような雨の記述は随所に記されており、たいていの場合、同じ箇所には旱も記されている。人事や地方のこと、献上の品々、遣唐使や渤海からの使節の来訪、天皇の行幸、また各種の儀礼のことなどと並んで、旱、雨、風のことが記されている。編年体の記述のなかで、季節を追うようにして、頻繁に出てくる。

(一四) 災異としての地震―『日本後紀』より

六国史において、旱、雨、風のことが随所に記されていることを『続日本紀』から引用してみたのであるが、先に触れたように、詔という天皇のことばのなかで言及されることも多い。

六国史のなかで『続日本紀』の次に纏められたのは『日本後紀』である。七九一年から八三三年のことが記されている。巻第二十四の弘仁五年八月には、次のような詔がある。

【八】 日本後紀 卷第二十四 弘仁五年(八一四年) 八月

壬申、詔曰、朕恭踐天位、纂承洪基、吁食宵衣、星珪頻改、雖躬居紫極、而心遍黎民。庶齊七政、以無水旱之災、勸九農、以有仁壽之喜、頃年以降、春耕候花、不愆濯枝之潤、秋稼垂穎、可餘栖畝之粮、

是則神靈降祥、佛子修善之所致也、朕思膺斯嘉貺、寄中實於百神、欣彼豐稔、報勤勞於萬姓、宜委天下國宰、明加檢校、奉官社幣帛、竝施給高年僧及耆老、鰥寡孤獨不能自存者、各有等級、務在賜給、稱朕意焉。壬申、詔して曰わく、「朕恭みて天位を踐み、纂ぎて洪基を承く。吁食宵衣して、星珪頻りに改る。躬紫極に居ると雖も、心黎民に遍くす。庶わくは、七政を斉えて、以て水旱の災無く、九農を勸めて、以て仁寿の喜有らんことを。頃年より以降、春耕花を候ちて、濯枝の潤を愆たず、秋稼穎を垂れて、栖畝の粮を余す可し。是れ則ち神靈の祥を降して、仏子の善を修むるの所致なり。朕斯の嘉貺に膺りて、中実を百神に寄せ、彼の豊稔を欣びて、勤勞を万姓に報いんことを思ふ。宜しく天下の國宰に委ねて、明かに檢校を加え、官社に幣帛を奉るべし。並びに高年の僧尼及び耆老・鰥寡孤獨の自存すること能わざる者に施給すること、各等級有れ。務めて賜給に在れ。朕が意を称せしめよ」と。

壬申 天皇が次のように詔りした。

朕は謹んで皇位に即き、天皇としての事業を引き継ぎ、政務に励んで年月を経た。身は宮中にあつても、心は広く人民のことを思っている。七政(七つの政治の拠所)をととのえて水旱の災害がなく、九農(古代中国の農業に関係する九つの官職。ただし、ここは国司)を励まして仁寿(仁徳と長寿)の喜びが得られることを願ってきた。そして、年来春耕が始まり、開花の時期を待つてありがたい雨が降り、秋には稲穂が垂れて、収穫しきれず、畝間に穀物を残しているほどである。これは神霊が幸いを降し、僧侶が修善をしてくれた結果である。朕はこの喜ばしい賜物を得たことで、神々に真心を捧げ、豊作を喜んで天下の万民の勤勞に報いようと思う。そこで、国司の監督下で、官社に奉幣し、併せて高年の僧尼および六十一歳以上の老人、鰥・寡・孤・独で自活不能者に等級をつけて物を施給せよ。あまねく支給することに心がけよ。そして、朕の意を称えさせよ。

ここまで紹介してきた【五】【六】【七】【八】の記載内容を理解するには、六国史における「災異」というものを考えておく必要がある。災異は「祥瑞」と対のもので、早川庄八は次のように説明している。

地上の本来の、そして真の統治者は、宇宙の統治者である天帝すなわち昊天上帝である。だが人に非ざる天帝が地上を現実に統治することはできないから、地上のだれかにその統治を委任することになる。そのとき天帝の命令すなわち天命がくだる。天命をくだされた者はこれを受けて、すなわち受命して、天子として地上を統治する。受命者となり天子となりうる唯一最大の条件は、その者に徳があることである。有徳の君主として、徳を以て人民を統治する能力を有する者でなければならない。このため天子は常に天帝を祀り、天帝の意志を聞き、有徳の君主たるべく努力する。もし天子が徳を以て統治し、それが天帝の意志にかなうものであるならば、天帝はその徳をめでて、地上にめでたいしるしをもらたす。すなわち祥瑞である。またもし天子が徳に欠け、その統治が天帝の意志に反するならば、天帝はその不徳を責めて地上にわざわいをもらたす。すなわち災異である（早川庄八「律令国家・王朝国家における天皇」六三）。

村山修一によれば、陰陽道とは、「古代中国に起った陰陽五行説を中心とする思想とそれに基づく諸技術をさすもので、日月星辰の運行・位置を考え、相生相克の理により吉凶を判じ、あらゆる思考や行動の指針を導き出そうとするところにおもな目的がある」（村山修一『日本陰陽道史総説』、四）。ここにあげた早川の説明のように「天」と「人」とが結びついているという「天人相関思想」も陰陽道の考え方である。『続日本紀』に祥瑞として出てくるものは、（一つの茎からいくつも花が咲いている）嘉蓮、（別の木同士、別の枝同士の先が一緒になっている）木連理、白鳩、白雉、白燕、白鼠、白雀、白鳥、赤鳥、白狐、慶雲、甘露などで、各地から朝廷に「瑞奏」されることも多い。一方、災異は、たとえば文武天皇の時代では「日蝕はじめ大風、旱魃・飢饉など異常気象・農耕不作が主になって」おり、後の聖武天皇の時代では「日蝕、太白、熒惑両星に関する天文の変、地震・山火事・暴風雨・疫病流行」などである（同上書、五四―五八）⁽²⁾。「太白」は金星、「熒惑」は火星である⁽³⁾。

なお、六国史が編纂できたのは、当時の朝廷や地方の国々で日々の出来事が記録され整理され保管されているからでもあった。また、当時の規定である「公式令」

には「国有瑞条」と呼ばれる規定があり、諸国が飛駟を發して中央に報告すべき事項が定められていた。「凡そ国に大瑞及び軍機、災異、疫疾、境の他の消息有らば、各使を遣りて、馳駟して申上せよ」というものである（井上光貞他『律令』三九四―三九五）。松本卓也は、この規定で報告すべき「災異」について、「水旱・地震等のいわゆる実害に限定されているのか、それとも異常現象も含むのか」については研究者のあいだで見解が分かれているが、「実例を六国史に求めるかぎり、異常現象も即時報告されているようである」と述べている（松本卓也「律令国家における災異思想」一四九―一五〇）⁽⁴⁾。

もちろん「祥瑞は天子の徳に天が呼応して現われるものとされ、改元や即位のセレモニーの一環として人為的に仕組まれることが多い」（渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』一三二）という指摘があるように、また先にみたように、六国史が「正史」として時間をかけて撰修されたものであるから、災異も祥瑞も記述全体がひとつの世界観をなすように構成されていると考えるべきであろう⁽⁵⁾。

二、まつりごと

ここまで、六国史のうち『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』の記述をみてきたのであるが、先に述べたように、これらは「正史」として、後代の朝廷の命により時間をかけて編纂されたものである。全体としてひとつの世界を構成している。詔という天皇のことばについて、青木和夫は、当時の意志決定の方法に関連づけて、次のように説明している。

まつりごと（政治）という日本語は本来祭祀を意味するのである。（中略）まつりごとの政治という側面では、皇太子や大臣など補佐する者がつねにいるのがふつであった。（中略）八世紀の律令体制では、これにあたるものが、太政官首脳部の会議である。ふつうは左・右大臣らが議長となり、大・中納言や参議ら十人前後の会議で決定したことを、天皇に奏上し、裁可ををとおぐという手続きをふむ。その結果は公式令で論奏・奏事・便奏などとよんでいる諸書式によって公

示される。どのような手続きをふんでも、結局は天皇の天命として、日本じゅうに伝えられる(青木和夫『奈良の都(日本の歴史3)』一一九―一二〇)。

雨や旱、風の記述の多くが、この詔のなかでの記述であり、日本じゅうに伝えられたのである。

奈良時代は農業が社会の基盤を構成していた。毎年の稲の実り具合が人々と国家の両方にとって、もつとも重要なことであった。

国民が水稻耕作にたよらねば生活できないからこそ、耕地を保証する班田收授^{はんてんしゅうじゅ}制度が必要になる。班田制がおこわれるかぎり、租・調・庸などを取りたてて国家財政を維持することができる(同上書、三一)。

この水稻耕作は、春夏秋冬の季節とともに繰り返される。

農家の一年は、今年の豊作を祈る春の祭で始まる。(中略)近郷近在の人々が酒食を持って集まり、田の神をはじめ、もろもろの神を祭る。(中略)近ごろ朝廷からといた法令も、こういう機会に読みあげられる。朝廷では、二月中旬に伊勢神宮へ勅使を派して、祈年祭^{としごいのまつり}を執行する。

(中略)「秋の」収穫の後には、春の祭りと同じような、神にたいする感謝の祭があった。(中略)朝廷では、九月に神嘗祭^{かみなめ}の勅使を伊勢に送り、十一月には相嘗祭^{あひなめ}のために、大和や紀伊の大きな神社から神主たちが神祇官へ幣帛を受取りにくるようになっていた(同上書、二四四―二四七)。

「春耕候花。不愆濯枝之潤。秋稼垂穎」と『日本後紀』に記されているように、開花の時期に雨が降り、秋に稲を収穫するということが、あるべきの日常の姿であった。「水旱之災」がなく豊作になるように祈るということは、きわめて大切なことであった。雨は、農業という一番の生産活動を支えるものであった。まつりごとの記録として編纂された六国史を構成する重要な要素として、雨、旱、風は記され

ていたのである。その背景には「災異」という考え方があっても、現代の私たちが読んだときに、それらは実際に発生したこととして記されているのではないかと受け止めることもできる。具体的な被害について記されている箇所があれば、それはなおさらのことである。こうした記述は、当時の社会のありかたと深く関わっていたといえるだろう。

こうして、朝廷が保存していた様々な史料のなかから選ばれて構成され、勅撰の正史として編纂された六国史には、旱や雨、風のこと、季節のめぐりに合わない場合に、幾度も記されているのである。そして、詔のなかでも、旱、雨、風は繰り返し言及されている。

三、発生・被害・災異―地震の多面的記述

さて、地震のことである。

民俗学の吉野裕子は、地震と鯢^{なまず}の結びつきを述べ、鯢が陰陽五行の「五黄土気」にあたるのに関連して、次のように論じている。

実は、五黄土気は地震によってもたらされる破壊・荒廃・死滅などを象徴するものであって、地震そのものを表象するものではない。天の鳴動が「雷」であるのに対し、大地の震動が「地震」である。地震の本質は「振動」「震」であって、破壊・荒廃はその結果に過ぎない(吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』一一七)。

古代の日本において、大地が揺れるということ、その結果としての破壊は、区別して考えられていた。雷という天の鳴動と地震という大地の震動という対照がなされているように、地震そのものは、必ずしも被害をもたらすものではない。旱、雨、風などとは異なり、地震の記述は季節のめぐりとは関係なく出てきている。詔に記されている件数も少ない。本稿の【五】【六】のように、大きな被害を出した地震は、その被害の詳細と共に、その後の朝廷の対応についても記されたり、直後の詔においても言及されている⁶⁾。しかしそうした記述の例は少なく、多くの場合、

ただ「地震」とだけ記されているのである。いずれにしても地震は災異のひとつとして記されていたと考えれば理解は簡単であるが、現在の私たちが読んでみると、地震というものが、雨や旱や風とは違ったふう⁽⁷⁾に記されているともいえるのではないだろうか。地震とは、まず、大地が振動することであり、次いで、天の意志が示されていることであり、さらに、時として大きな被害を生じることでもある。こうした地震の三つの側面が、奈良時代の正史には、まつりごとの重要な構成要素として記されていたといえるだろう。

日本の国と災厄との関係について、小松左京（一九三一—二〇一一）は『日本沈没』のなかで、次のように記している。

台風国であり、地震国であり、大雨も降れば大雪も降るといふ、この小さな、ごたごたした国では、自然災害との闘いは、伝統的に政治の重要な部分に組み込まれていた。だから多少不運な天災が重なっても、復旧はきわめてすみやかで活発に行なわれ、国民の中に、災害のたびにこれをのり越えて進む、異国人から見れば異様にさえ見えるオプティミズムが歴史的に培われており、日本はある意味では、震災や戦災や、とにかく大災厄のたびに面目一新し、大きく前進してきたのだ。——災厄は、何事につけても、新旧のラジカルな衝突をいやがる傾向にあるこの国にとって、むしろ人為的にでなく、古いどうしようもないものを地上から一掃する天の配剤として、うけとられてきたようなふしがある（小松左京『日本沈没』上、一五三—一五四）。

六国史を讀んでみると、この指摘に重ね合わせることができる。とはいえ「自然災害との闘い」というと、「震災」と呼ばれるような稀な大きな地震のみが該当するので、やや限定的にすぎる。より広く、季節のめぐりに合わない雨や旱、風、あるいは被害を伴わない地震などの「災異」が更に生じることがないようにすること、そしてもしも生じた際には拡大を防止し、場合によっては被害に対応する、というようなことになろうか。六国史の記述を考察する限りにおいて、雨、旱、風、そしてただ「地震」とだけ記された地震というものは、まつりごとが、いわば年

中、幾度も意識して受け止めることがらとして存在していたのではないだろうか。そして、地震は、季節のめぐりを越えるものなのである。

『続日本紀』には、「風」に関する次のような記事もある。

【九】続日本紀 卷十九 天平勝宝五年（七五三年）九月

壬寅、摂津国御津村、南風大吹、潮水暴溢、壊損廬舎一百十餘区。漂没百姓五百六十餘人。並加賑恤。仍追海濱居民、遷置於京中空地。

壬寅、摂津国御津村に南風大きに吹き、潮水暴に溢れて、廬舎一百十餘区を壊ち損ひ、百姓五百六十餘人を漂没す。並に賑恤を加ふ。仍て海濱に居む民を追して、京中の空きたる地に遷し置く。

壬寅（五日）。摂津国の御津村では、南風が大いに吹いたため海水がにわかに陸地に押し寄せ、家屋百十余カ所が壊れ損じ、人民五百六十余人が流され沈んだ。（そこで被害をうけた者に）それぞれ物をめぐみ与えた。これにより、海濱に居住する人民を召して京中（難波京であらう）の空地に遷し住ませた。

浸水した海岸部の人々を都に移住させたというのである。「遷し住ませる」ということが、長期的にみれば、「異様にさえ見えるオプティミズム」を上回る合理的な判断ともいえる。『続日本紀』に記されたということは、後々に伝えるべく収録された記事だということになる。ここでは、風も潮も、災異としてよりは、具体的被害を生じたこととしてきわめて冷静に記されている。六国史のなかには、このような記述も含まれている。

奈良時代を中心とした正史において、季節のめぐりに合わない雨、旱、風、そして「地震」と記すだけの地震が頻繁に記されていた。『続日本紀』には、稲作に直結する雨とほぼ同じ回数、「地震」が記されている。まつりごとが、そうしたことがらを、どれほど強く意識をしていたのかということを読み取ることができる。

地震は、六国史という編年体の正史においては、雨や旱、風などのように一年の季節のめぐり合わせとして記述することはできなかった。また、まつりごとの集約としての詔のなかでも触れられることは少なかった。大半は地震が発生したとのみ

記され、大きな被害が生じたものについては、詳細に記される。そのいずれかであった。

実際に起こった地震、誰かが気づいた地震、多くの人びとが感じた地震、朝廷が把握した地震、文書として記録された地震、そして発生しなかった地震。正史のなかに、あるものは記され、またあるものは記されなかったであろう。六国史の記述を読むと、歳月を重ねて編纂された編年体の漢文のなかに「地震」という文字は、それを適切に位置づける文脈のないまま、突如として表れる。ただ地震とだけ記されたものも、被害を詳細に記したものも、いずれも文脈をもたないまま記されている。

その意味で、千年以上前の記述は、現代の私たちにとっても身近なものとして読める。地震というのは、月日のめぐりには合わないものである。そして、社会のありかたや時代の変化とも関連づけることができないものであるのかもしれない。

(二〇一二年一月二六日)

註

(1) 本文中の『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』からの引用は、漢文(原文)、読み下し文、現代語訳を併記して掲げる。それぞれの出典は、次のとおりである。

(漢文および読み下し文)

(現代語訳)

『日本書紀』 日本古典文学大系(岩波書店)

中公クラシックス

『続日本紀』 新日本古典文学大系(岩波書店)

東洋文庫

『日本後紀』 訳注日本史料(集英社)

講談社学術文庫

なお、引用に際して、表記を変えた箇所がある。

(2) 災異は『類聚国史』という史料の範疇にもなっている。『類聚国史』は、六国史の驥尾である『日本三代実録』の編纂を手がけた菅原道真の手になるものといわれている。二〇〇巻あったということであるが、遺っているのは本文六一巻といくつかの逸文のみである。各巻ごとに部門とその下位の項目からなり、各項目ごとに六国史の関連記事が編年で並べられている。吉岡眞之によれば「政務の執行のための実用的な書物として尊重された」。様々な史料をもとにして、全体の構成を復原すると、分かっている範囲で、神祇、帝王、皇后、後宮、東宮、皇親、人、歳時、音楽、賞宴、奉獻、政理、刑法、職官、文部、田地、祥瑞、災異、仏道、風俗、殊俗、というような項目で構成されていたという「吉岡、九七」。これらの項目は、六国史の記事を分類した際の範疇であり、六国史の

すべてが編纂され、その直後に編纂された類聚国史において用いられたものであるから、地震を含む災異と、それと対にされている祥瑞は、六国史における地震の位置づけを示すものとなる。

(3) このうち、同じように天文異変とされている、最大の天変と考えられていた日蝕と他の現象とは、制度的な処理の仕方が違っていたという。古代日本で天文の教科書として使われた『晋書』天文志中という文献によれば、太陽は君主の象徴で、「日食は陰気が陽気を侵し、臣の力が君主を圧倒することを表し、国が滅亡するとされる」(細井浩志『古代の天文異変と史書』、九五―九六)。そこで「儀制令」という規定には「日蝕の時は百官が本司を守って事務をとらず、日蝕が終わってから退朝する」と規定されていた(井上光貞他『律令』三四五)。「本司」とは、所属する官庁のことである。日蝕の場合には、それが起こる八日前には、歴博士という予報官から陰陽寮、中務省を通じて予報が出された。また平安時代の暦には、日蝕(予報)が記入されている。このように一般の天文異変が原則非公開であるのと比較して日蝕については「大きく異なっている」のである(細井、前掲書、九六)。

(4) 都から離れた地方でも、大きな出来事があれば、東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七本の幹線道路を用いて、駅馬によって朝廷に伝えられた。青木和夫によれば、これらの幹線道路には約三十里(一六キロ)間隔で駅が設置されていた。そこには事務室や厩舎、宿泊施設が整えられていたらしい。そして「大路」つまり山陽道の太宰府までの駅には二十四、(中路)である東海道・東山道の駅には一〇匹、他の四道である「小路」には五匹の馬が用意されていた。この幹線道路を利用して、「急速の大事」が生じた場合、「飛駅便」が一日に十駅以上の早さで朝廷に伝えた。馬は駅毎に替え、人は交代せずに、三駅ごとに給食などの接待を受けた。これらを基にして計算すれば、八世紀の日本で最も重要であった平城京と太宰府を結ぶ西海道約六七〇キロを四日強で連絡できたということになる。青木は『続日本紀』に記された太宰府を中心とした藤原広嗣の乱をとりあげて検討しているが、「発つ時刻が早ければ四日四晩、遅くても五日四晩で連絡しえた」と述べている(青木和夫『日本律令国家論攷』二八九―三二七)。

(5) 漢文で正史をまとめることが中国に倣ったものであることは言うまでもない。既に小島憲之が『上代日本文学と中国文学』で指摘しているが、榎本福寿は『日本書紀』で雨や風などの記述に『漢書』などを「そのまま利用している」箇所について詳細に論じている(榎本福寿『日本書紀の災異関連記事を読む』)。また、中国(唐)の正史は紀年体であり、日本の六国史が編年体であるのは、むしろ中国の「正史」の前段階である「実録」に該当するという(神野藤昭夫『六国史と歴史の手法』)。

なお、六国史において、個別の旱、雨、風や地震などが、その時におこった「自然現象」として記されているのか、政治的な文脈に関わる「災異」として記されているのか

については、さまざまな議論がある（東野浩之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」、榎本前掲論文など）。歴史地震学という分野では、六国史などの歴史史料に記された地震の記述から、過去に発生した地震を探る研究も増えている。

(6) 西村虎之助は、大正十二（一九二三年）に発表した論文「王朝時代の地震とそれに対する思想」で、中国と日本の正史における地震の記述を紹介している。奈良時代から平安時代にかけて、地震の後に朝廷がどのような対応策を講じたのかを整理し、山陵使、検看神社使、検地震使の派遣、賑恤、免租庸調、恩赦の六つに整理している。後に荘園史を中心に業績を挙げる日本史研究者が、同年に発生した関東大地震をうけて、こうした論文を書いていることが興味深い。ちなみに、六国史など古代の史料における地震の記述を収集、整理する作業は、明治二四年（一八九一年）の濃尾地震を契機に震災予防調査会ではじまり、同三七年（一九〇四年）に『大日本地震史料』としてまとめられた。地震学の分野では、その後も増補された史料が編集されている。大きな地震が発生すると、過去の地震に関する史料を参照しようとするものである。

(7) 註(3)で紹介した細井浩志『古代の天文異変と史書』では、地震についても、天文異変と同じく、記録が保管され、『続日本紀』における地震記述は、編纂作業によって、恣意的に改変された様子はないものとしている。

参考・引用文献

- 青木和夫『奈良の都（日本の歴史3）』中公文庫、二〇〇四年（初出、中央公論社、一九六五年）。
- 青木和夫『日本律令国家論攷』岩波書店、一九九二年。
- 青木和夫「続日本紀への招待―巻第一から巻第六まで―」青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸 校注『続日本紀』一（新日本古典文学大系12、岩波書店、一九八九年）。
- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸 校注『続日本紀』一―六・索引年表（新日本古典文学大系）岩波書店 一九八九―二〇〇〇年。
- 井上光貞・関晃・土田直鎮・青木和夫『律令』（日本思想大系 三）岩波書店、一九七六年。
- 井上光貞監訳、川副武胤・佐伯有清・笹山晴生訳『日本書紀』全三巻（中公クラシックス）中央公論新社、二〇〇三年（初出、中央公論社、一九八七年）。
- 榎本福寿「日本書紀の災異関連記述を読む―日本書紀の文献学をめざす試み―」日本史研究会編『日本史研究』四九八、二〇〇四年。
- 神野藤昭夫「六国史と歴史の手法」『岩波講座 日本文学史 9・10世紀の文学』岩波書店、一九九六年。
- 黒板勝美『新訂増補 普及版 国史大系 日本書紀』前篇・後篇、吉川弘文館、一九八一年。

黒板勝美『新訂増補 普及版 国史大系 続日本紀』前篇・後篇、吉川弘文館、一九六八年。

黒板勝美『新訂増補 普及版 国史大系 日本後紀』吉川弘文館、一九七五年。

黒板伸夫・森田悌編『訳注日本史料 日本後紀』集英社、二〇〇三年。

小島憲之「上代日本文学と中国文学―出典論を中心とする比較文学的考察―」上、塙書房、一九六二年。

小島憲之・直木孝二郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守 校注・訳『日本書紀』全三巻（新編日本古典文学全集）小学館、一九九四―一九九八年。

坂本太郎「六国史の文学性」『坂本太郎著作集 第三巻 六国史』吉川弘文館、一九八八年（初出、『国語と国文学』四一―四、一九六四年）。

坂本太郎『六国史』吉川弘文館、一九七〇年。

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注『日本書紀』上下（日本古典文学大系）岩波書店、一九六五―一九六七年。

小松左京『日本沈没』上下、小学館文庫、二〇〇六年（初出、光文社、一九七三年）。

白川静『新訂 字訓』平凡社、二〇〇五年。

直木孝二郎ほか訳注『続日本紀』全四巻（東洋文庫）平凡社、一九八六―一九九二年。

西岡虎之助「王朝時代の地震とそれに対する思想」『西岡虎之助著作集 第三巻』三一書房、一九八四年。（初出、『社会史研究』一〇―四、一九二三年）

『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇一―二〇〇二年。

早川庄八「律令国家・王朝国家における天皇」朝尾直弘他編『日本の社会史 第3巻 権威と支配』岩波書店、一九八七年。

東野浩之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」日本歴史学会『日本歴史』二五九、一九六九年。

星野聰・村尾義和『続日本紀総索引』上下・別冊、高科書店、一九九二年。

細井浩志『古代の天文異変と史書』吉川弘文館、二〇〇七年。

松本卓也「律令国家における災異思想―その政治批判の要素の分析―」黛弘道編『古代王権と祭儀』吉川弘文館、一九九〇年。

森田悌『日本後紀 全現代語訳』全三巻、講談社学術文庫、二〇〇六―二〇〇七年。

吉岡眞之「類聚国史」皆川完一・山本信吉編『国史大系書目解題』下巻、吉川弘文館、二〇〇一年。

吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』人文書院、一九八三年。

六国史索引編集部『六国史索引』全四巻、吉川弘文館、一九六三―一九六九年。

渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀（日本の歴史04）』講談社学術文庫、二〇〇九年（初出、二〇〇一年、講談社）。

How Earthquakes were Described in Official Documents of Ancient Japan : A Sociological Study of the Earthquake (2)

HARADA Takashi

Abstract : This is the second part of a research project on a sociological study of the earthquake. In this paper, I have focused on the descriptions of the earthquakes in *Nihon shoki*, *Shoku nihongi*, and *Nihon koki*. These are the first three documents of *Rikkokushi* (Six National Histories) edited between 720 and 901 A. D. by Japanese national government. They tell the birth-myth of the Japan and official events and ceremonies of Nara and Heian Periods as official history.

In these documents, rainfalls, droughts, heavy winds and earthquakes were written as some of the negative signs to the government from heaven, in comparison with positive signs such as white pigeons, red crows and lucky clouds. This comes from Sain-Zuisho (unfortune-fortunate) thought based on Chinese principles of yin and yang.

Meanwhile, in ancient Japan, rice farming was a major industry. National government depended on the income from farming people. So, emperors and empresses and officials were so keen to the rainfalls and droughts, as they connected directly the harvest of each year, that special messengers were sent to the shrines to pray rainfall and that emperors granted the amnesty. Moreover, we can find several descriptions about the disasters caused by rainfalls, droughts and heavy earthquakes.

As a whole, we could conclude that earthquake was described, in national documents, as one of the 'natural' phenomena involved directly in national politics in ancient Japan.